

博士学位審査 論文審査報告書（課程外）

大学名 早稲田大学
 研究科名 大学院人間科学研究科
 申請者氏名 鈴木 勝己
 学位の種類 博士（人間科学）
 論文題目（和文） 生と死の技法ータイ・プラバートナンプ寺のエスノグラフィーー
 論文題目（英文） The Art of Life and Death : Ethnography of Buddhist Temple Wat Phra Baat
 Nham Phu,Thailand

公開審査会

実施年月日・時間 2021年12月03日・18:00-19:30

実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第一会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	辻内 琢也	博士（医学）	東京大学	医療人類学
副査	早稲田大学・教授	小野 充一	医学博士	東京医科大学	緩和医療・臨床死生学
副査	早稲田大学・教授	原 知章	博士（文学）	早稲田大学	文化人類学・民俗学
副査	相模女子大学・名誉教授	浮ヶ谷 幸代	博士（学術）	千葉大学	文化人類学

論文審査委員会は、鈴木勝己氏による博士学位論文「生と死の技法ータイ・プラバートナンプ寺のエスノグラフィーー」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 質問：仏教用語生死（しょうじ）、生死、生と死が混在しているので統一した方がよい。英訳も考えて概念を明確にする必要がある。

回答：仏教の枠組みを超えた「生と死」で概念を整理し英訳も検討する。

1.2 質問：どこまでがタイにおける仏教の論理なのか。僧侶がどのように教えを伝え、どのように仏教看護を実践しているか。

回答：調査対象となった寺院は上座部仏教であり、大乘仏教観とは大きく異なる。寺院の仏教看護は、僧侶ではなく在家信者である療養者とケア提供者が共に自分達で「苦」に対する積極的な読み解きを実践しているところに特徴がある。

1.3 質問：文献研究の部分で、看取りケア、文化ケア、東南アジアにおけるケアなど、

田辺繁治研究も含めて先行研究の検討を掘り下げて欲しい。

回答：田辺の生の技法は、生のための公共空間を切り拓いていく自己統治の技法であるのに対し、本論文では生と死が表裏一体で来世と関係づけられており、異なるので整理したい。

- 1.4 質問：レイニンガーの「文化ケア」は重要な概念であるが、実際の調査で得られた結果から筆者自身が概念を提案した方がよい。

回答：文化ケアを「情動のケア」として読み替える方向性で論じたい。

- 1.5 質問：本論文は社会学者トニー・ウォルターの「良い死」について批判していることになる。寺院でつくられた死のあり方とどう違うのか。

回答：寺院における死はイデオロギーとしての「良い死」とは異なるので、その点を説明していく。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

- 2.1.1 調査地に関する基本的な情報（寺院生活者の内訳）、具体的な調査・滞在期間などの情報が必要である。
- 2.1.2 論文として推量で書くべき箇所とそうではない個所を精査し、文末の推量表現を書き分ける必要がある。
- 2.1.3 序章第2節に、HIV/AIDSの歴史的概略、タイ国内感染者の推移を提示し、歴史上の本研究の位置づけを示す必要がある。
- 2.1.4 タイ社会におけるLGBTの位置づけについて説明をしておいた方がよい。
- 2.1.5 田辺のケア論、文化ケア論を論述する節を用意する方がよい。
- 2.1.6 イデオロギー化した「良い死」と本論文における「良き死」との違いを明確にするべきである。
- 2.1.7 本研究の限界と展望を記し、日本の医療者に向けてどのように成果を伝えて共同研究を実施していけるのかを示す必要がある。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

- 2.2.1 調査に関する基本的な情報が補足された。
- 2.2.2 文末の推量表現について精査し、適切にかき分けられた。
- 2.2.3 UNAIDS報告書を元に、序章第2節にHIV/AIDSの歴史と感染者の推移が提示され、歴史上の本研究の位置づけが記述された。
- 2.2.4 タイ社会におけるLGBTの位置づけが序章第2節第3項に記述された。
- 2.2.5 序章第3節に田辺ケア論について触れられ、文化ケア論として新たに第1章第3節が設けられた。
- 2.2.6 新たに第3章第3節に第5項をたてて「良き死」について論じられた。
- 2.2.7 限界と展望、日本の医療者との共同研究実施の可能性について記された。

3 本論文の評価

本論文は、タイ国エイズホスピス寺院における 15 年にわたるフィールドワークに基

づく、人類学研究における民族誌として厚い記述を達成した大変重厚な労作である。

3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文の目的は、エイズに苦しみ亡くなっていく寺院療養者に焦点を当て、人々が主体的に生と死を創り出していく技法への参与観察を通して、看取りケアの意味を明らかにしていくことである。この目的は、理論的基盤となる人類学・社会学・死生学・看護学における先行研究を精査したうえで設定されており、学術的に明確性・妥当性がある。

3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：長年にわたるフィールドワークを通して、現地の人々との間に深い信頼関係を築き、暮らしを共にすることで対象者と親密な関係性を築いている。フィールドでは、いわば「素人」の医療ボランティアとして看取りへ参与し、仏教寺院での年中行事に参加し、自由会話の記録とその分析を繰り返してきた。この人類学研究の基盤となるフィールドワークの採用には明確性・妥当性が確保されている。

なお、本論文で実施した調査の手続きについては、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を取得し（2012-185）、調査の前には参加者に対して調査内容についての十分な説明を行い、インフォームドコンセントが得られた上で実施したとしており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文の成果は、日本臨床死生学会・日本文化人類学会・日本質的心理学会の学会誌において原著論文として審査・採択されており、その明確性・妥当性は証明されている。

3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1 これまでにキリスト教の流れを汲むホスピスやビハーラ仏教ホスピスを対象とした研究は多数なされてきたが、本論文の対象はタイ国の HIV/AIDS の療養者に特化した寺院であり、フィールド選択に独創性が認められる。また、プラバートナンプ寺における暮らしを描いた本格的な民族誌は、国際的に見ても存在しない。

3.4.2 医療者の立場からの看取り研究ではなく、いち人類学徒が、医療者としての訓練を受けていない「素人」として、友人や親族に近い立場から死にゆく療養者との間に交感的な関係性を築き、看取りケアに関する知見を見出しており、極めて新規性が高い。

3.4.3 ケアする側に「何ができるか」が問われてきた看取りケアの考察から、「何もしないケア」という上座部仏教理念に基づくケアの実践を見出した点には、従来の看護ケア論から飛躍した独創性と新規性が認められる。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 超高齢化と多死社会を迎える日本・タイ・欧米先進諸国に対して、新たな看取りケアの在り方の議論を喚起する論考として社会的意義がある。

3.5.2 欧米中心に発展してきたデス・スタディーズにおいて、非西欧社会の事例を通してその知見を再考することを迫る学術的意義が認められる。

3.5.3 葬制やコスモロジーを中心とする静的な死の人類学研究から、看取りに参与することで動的な死を扱う人類学研究へと転換を図る画期的な試みには、高

い学術的意義がある。

- 3.5.4 仏教看護において、ケアする・されるという二者関係を越えた仏陀を含めた三者関係が提示され、そこに情動(美意識)が重んじられていることが示された。ここには、人々が主体的に選択するというロジック、すなわち欧米主導の近代的自己の再考という学術的価値が認められる。
 - 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
 - 3.6.1 心理学・看護学・福祉学・社会学・人類学領域における病いの語り研究に対する新たな見解を示した。語られたテキストだけではなく、語りの場や人々のふるまいの分析により、言語的な制約を乗り越えようとする試みが、質的研究の成果として人間科学に対する大きな貢献がある。
 - 3.6.2 生と死の考察から文化人類学・医療人類学・臨床死生学および質的心理学における学際的知見を創りだした。ケアの多元性や多層性、ケアの場における人間関係を分析した成果として人間科学に対する貢献がある。
 - 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。
- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。
 - ・鈴木勝己：タイ・プラバートナンプ寺における「病いの語り」；生死の偶有を必然へ読み替える技法の考察. 質的心理学フォーラム(12), 35-44. 2020 [原著・査読有]
 - ・鈴木勝己：「赦し」の技法；タイ・プラバートナンプ寺における看取りの考察. 文化人類学 84(3), 331-348. 2019 [原著・査読有]
 - ・鈴木勝己：看取りケアにおける仏教看護の可能性；タイ・エイズホスピス寺院プラバートナンプ寺の事例より. 日本臨床死生学 23(1), 1-9. 2019 [原著・査読有]
 - ・鈴木勝己：“何もしないケア”；タイ・エイズホスピス寺院における死の看取り. 浮ヶ谷幸代(編)『苦悩とケアの人類学』世界思想社, 京都, pp253-285. 2015 [著書・分担]
 - ・鈴木勝己：埋葬/葬送儀礼. 臨床死生学テキスト編集委員会『テキスト臨床死生学；日常生活における「生と死」の向き合い方』勁草書房, 東京, pp173-181. 2014 [著書・分担]
 - 5 学識確認：関連科目については、「大学院人間科学研究科博士学位論文（課程外）審査に関する内規」第17条第2項第三号を満たすことを確認した。また、外国語については、同内規第18条第4項第三号を満たすことを確認した。
 - 6 結論
以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上